慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミルとマーカンチリズム
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.12 (1922. 12) ,p.1743(109)- 1754(120)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221201-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の設計圖）

かくて實際の事業は一九〇四年の夏より着手せられたが前述の如く田園都市會社は土地の所有權を有する丈けで家屋の建築は私人又は他の會社に委ねたゞその設計等に就いて一應會社の認可を要する事とした。（四五頁以下參照）此の土地の最初の居住者は家族をつれた自由職業者並びに實業關係の人々であつたが彼等は此の都市の建設に就いて期待を有してゐた人々で實に先驅者としての危險を冒す精神を以つて集つたのである。一九〇五年に Heatly-Gresham Engineering Company, Ltd. と Garden City Press, Ltd. との兩會社が田園都市工業の先驅者となつて以來同七年迄の間に非常の發展をなした。Purdom 氏は其著の五十四頁に田園都市發展の歷史を一括し『十年後（氏の著書は一九一三年發行）の今日に於いては誤り得ざる獨自の性質を發揮してゐる』と述べてゐる。

以上を以つて Purdom 氏の The Garden City の粗雜なる抄譯を終へる。

かのジョン・ラスキンが一八七〇年の頃親友なる Dr. Acland 並びに Dr. John Simon の兩者と共にロンドンの裏道並びに郊外の貧窮せる生活狀態を嘆じて之れが救濟策に就いて前兩者がかゝる不幸なる生活はロンドンの如き大都市には避く可からざる現象であると斷定したのに對してラスキンは答へた『よし、然らばこんな大都市を無くなしてしまへばいゝ』と。二人の友人は『君の云ふ所は非實際的の言葉だ。現在の狀態ではかゝる大都市がなければならないのだ』と反駁した。ラスキンは近代の議會議事に沒頭してゐる人間に『目的の弊害の根源にふれない樣な方策は何づれも實際的でない』と云ふ事を信ぜしめるの甲斐なきを感じて默した（Fors Clavigera. Letter x.）

田園都市の成立は地下のラスキンをして定めて會心の笑を漏さしめた事であらう。

最後に附言するのは田園都市に關しては之より先き一九〇五年に發行された A. R. Sennett 氏の Garden City in Theory and Practice と云ふ上下兩卷合せて千三百八十數頁に亙る尨大の著述がある內務省地方局有志編纂の名の下に明治四十年十二月に發行された「田園都市」はこの書に負ふものであらう。一九一九年に出版された New Ideals in the Planning of Cities, Towns and Villages の中に掲げられた諸種の參考書中には Howard, Purdom の兩氏の著書の外に Ewart G. Guipin, The Garden City Movement Up-to-Date (London, 1912) を發見しうる丈けであるが此の書は恐らく本稿に更に充分なる材料を供給しうるものと思ふ。（Patrick Geddes の Cities in Evolution には此の本の表題が Garden Cities Up-to-Date となつてゐる）最近の狀態に就いての材料を欠く點は筆者の最も遺憾とし且つ恥づる所である。（大正十一年十一月十三日稿了）

ミルとマーカンチリズム

榎本鑛治

一

「何人と雖も、富に就ては極めて正確なる觀念を有す」とは、John Stuart Mill の言である。彼に從へば、或術語の暗示する觀念は、實際の要求した所である。從て富とは何ぞやと云ふ疑問の如く極めて單純なる主題に就て、何等か有害なる觀念の混同が生起するであらうとは、殆

んど豫期せられぬ所である。然るに歴史上に於ては、斯る有害なる觀念の混同と云ふ事實が、存在して居たのである。換言すれば、歴史上には數多の理論家と實際的政治家とが、等しく又或時代には普ねく、如上の混同を敢えてなし、而も幾世紀かに亘て其混同せられた事實が、歐羅巴の政策をば全然虚僞の方向へと導いてしまつた。茲に於て富に關する誤解も生じて來たのである。

抑も人間の信條と法律とは、大いに經濟狀態を左右するものである。而も經濟狀態は、人間の心意的發達と社會的關係との上に影響を及ぼすからして、人間の信條と法律とを左右するに至るのである。要するに經濟狀態と、人間の信條及び法律とは、間接に關係し、又相互に作用するものである。併し之がために、富に關する研究が、大なる人間的利害關係の他種一切に關する研究と、混同せられる危險のあるものではない。（註一）

依て私は、Mill の所説に從ひ、Adam Smith の時代以來マーカンタイル・システム（Mercantile System, or Mercantilism）と云ふ名稱を以て呼ばれる學説を窺ひ、而して富の觀念に對する誤解を尋ねる積りである。

二

Mill に從へば、マーカンタイル・システムの流行した當時に於て、各國が公々然と、或は暗々裏に採つた一切の政策は、貨幣のみが富を組成すと云ふ推定に基いて居るのである。換言すれば富とは、現在貨幣の形態に非ざるも、直ちに貨幣に變じ得可き貴金屬より成るのである。故にマーカンタイル・システムの學説に依れば、一國内に於て貨幣又は地金銀を蓄積する傾向のあるものは、總て其國の富を增加することになるのである。其反對に一國より貴金屬を海外に流出せしむるものは、總て其國を貧困ならしめるのである。

然らば金銀坑を全然有せざる國の場合は如何。夫れは、外國貿易に依てのみ自國を富裕ならしめ得るのである。眞に外國貿易は、貨幣を齎らし得る唯一の産業である。併し外國貿易にしても、若し夫れが國内に輸入するよりも以上に貨幣を海外に輸出すると推定せられる時には、假令夫れが他種の形態にて如何に豐富なる、又如何に價値ある代替物品を輸入しても、總て損失の貿易と看做されたのである。故に貨物の輸出は、自國の眞實なる資源に取て甚だ嫌忌すべき樣々の手段を用ひてまでも、大いに之を歡迎し、又奬勵した。何故と云ふに輸出貨物の代償は、貨幣を以て支拂はる可き約束なるが故に、其報酬は、現實に金及び銀を以て支拂はれるものと期待せられたからである。之に反して貴金屬以外の輸入は、總て輸入貨物の全價格丈け自國に損失を齎らすものであると看做された。故に輸入貨物は、利潤を加へて再輸出せられる性質を有するか、若くは自國内に於て行はれる或産業の原料、又は道具となり、以て輸出貨物の生産費をより少額ならしめ、而して輸出高をより多額ならしめる能力を有するかでなければ、全然損失を齎らすものと看做されたのである。

次に Mill に從へば、マーカンタイル・システムは、世界に於ける商業を以て現存の金銀を最も多く取得しやうとする各國民間の競爭であると看做した。而して其競爭に於ては如何なる國民と雖も、他國民に幾何かの損失を與へるか、若くは少なくとも他國民の利得追求を妨げるかでなければ、何等自國に獲得する所はないのである。（註二）

然らば以上の謬論は、何故に生じたのであるか。私は Mill の所說を追ふて、其理由を求めるであらう。

三

本論に入るに先立つて特に注意を要することがある。即ち Mill の言ふ如く、人類の或時代に於ける普遍的信仰は、次の時代に及んでは餘りに明白なる不合理となることが屢々ある。而も其普遍的信仰は、何人も其時代に於ては夫れより脫却しなかつたか、若くは天才と勇者との偉大な努力がなければ、夫れより脫却し得なかつたかの事實に起因するのである。故に次の時代に於ける唯一の難事は、何故に斯の如き事柄が從來飽迄信ぜられたやうに見え得たかを想像することにある。此事實は、貨幣と富とが同義語（Synonymous）なりてう學說に就ても、亦屢々發生した。併し夫れは、餘りに奇怪至極な思想と思はれる故、眞面目な意見であるとは、思考せられ難い。とは云へ何人をしても、假令彼が斯る思想の流行した當時に生存したとしても、其迷想より脫却したであらうと確信させることは、不可能である。

總ての聯想は、一般生活に依て育成され、又通常の行事が一致協力して此促進を圖るものである。夫等の聯想が、其主題を研究する唯一の仲介手段である限り、吾々が今日甚だしい不合理と思考することも、自明の理と見えたのである。併し夫れも一度其疑義を問はれるならば、忽ちにして其運命は決定せられるのである。然るにも拘はらず、當時の人々は、經濟現象を叙述研究する或方法に未だ充分通曉するに至らなかつたので、何人も敢えて其疑義を問ふとすら考へなかつたらしい。其後時代の進展すると共に、夫等の經濟現象は、Adam Smith 及び彼の後繼者の影響を受けるや、始めて一般の理解を得る至つたのである。（註三）

四

扨て日常の談話に於て富は、貨幣にて言表はされるのが常である。今 Mill の言葉を借用すれば、諸君が他人に對して「君の財產は幾何であるか」と問ふ時に、諸君が其人より受ける返事は、「僕の財產は何萬圓である」と云ふのであらう。總ての收入と支出、一切の利益と損失、依て以て人々のより裕福となり、又より貧困となる所の凡ゆる事柄は、幾何かの貨幣が收受せられるか、若くは支出せられるかを以て計算せられるのである。

個人の財產目錄を見ると、單に彼の現實に所有せる、若くは彼に歸屬す可き貨幣（the money in his actual possession, or due to him）のみならず、又價値ある他種一切の貨物（all other articles of value）も包含せられるのである。併し是等のものが加算せられるのは、其物自體の特性に基づくものではなくして、其物の賣却に際して常に取得する貨幣額に因るのである。而して貨物其物が全然同種なる場合に、若し夫等の貨物が廉價に賣却せられるならば、其所有者は夫れ丈け富裕の程度を減少すると考へられるのである。若し何人でも自己の貨幣を利用しないならば、到底富裕となるものではなく、又何人も利益獲得のためには、進んで貨幣を費消しなければならぬと云ふことは眞理である。商業に依て裕福となつた人は、皆先づ（イ）商品と貨幣とを交換し、更に（ロ）貨幣と商品とを交換して、利益を得るに努めたからである。而して（イ）の場合は、（ロ）の場合と同樣に商業上の手續に於て甚だ肝要な部分である。實に利益獲得の目的にて商品を購入する者は、再び貨幣と引替に、

而も彼が支拂つたよりも多額の貨幣を取得せんとする期待を以て、彼の所有する商品を賣却するのである、故に貨幣獲得の事實は、當事者其人に取てすら、全體に於ける終局目的のやうに見えるものである。

併し勿論支拂をなすに貨幣を以てしないで、或種の他物を以てすることもないではない。詳言すれは何人も、自己の商品を賣却する時、其代價として買手の分讓し得る等價の商品を收受することがある。併し彼が是等の等價物を收受するのは、彼が之に對して貨幣的評價を試み、而して夫等の商品が彼に分讓せられた際の價格よりも一層多額の貨幣を、終局に於て彼に齎らすであらうとの信念を得た結果である。多額の取引を行ひ、以て自己の資本を急速に運轉する商人が、自己の手許に所有する現金（ready money）は、何時にても全資本の僅少部分に過ぎない。而も彼が其資本を自己に價値あるものとなすのは、畢竟其資本が貨幣に變化するが故に外ならぬ。

一體商人は、純然たる結末が現金、若くは信用證券にて決濟せられる（paid or credited in money）と云ふやうな商取引を考慮することは、全然ないのである。即ち商人は、彼が商業社會より引退する場合に、始めて自己の所有商品全部を貨幣に換算するものであつて、其時期以外には彼が自己の利益を貨幣的量額もて現實に取得しやうとは考へない。茲に於て貨幣は、恰かも唯一の富にして、又貨幣の價値（money's worth）は、唯だ其富を獲得する手段に過ぎないやうに見えるのである。今假に貨幣の欲求せられる目的は、一人若くは數人の欲望或は快樂（wants or pleasures）を充足するのでないとすれば、如何なるものであるかと問はれても、斯る社會組織の擁護者は、毫も此質問に當惑しないであらう。即ち彼は答へて曰く、「斯の如き目的は、富の使用に在る、而して內地產の商品に就てのみ云へば、其健全なる使用に在る。何故と云ふに後の場合には、諸君が消費した數量丈け自國民を富裕ならしめるからである。諸君は、諸君の興味を有する一切の逸樂（indulgences）に諸君の富を自由に費消せよ、併し諸君の富は、決して逸樂其物ではない。畢竟富とは、諸君が逸樂を購ふ所の貨幣の數量、即ち年々の貨幣所得（the annual money income）である」と。（註四）

右は、Mill の所謂マーカンタイル・システムの論據である。勿論一面には樣々の事情が存在して、マーカンタイル・システムの根抵をなす推定をば眞實の如くならしめると共に、他面には此主義が、貨幣と他種一切の價値ある所有物品との間に斷然と設定した區別に對して、甚だ不充分ながらも、其設定した理由には或種の微弱なる論據がある。次に私は、其論據に關する說明を Mill に求めるであらう。

五

前述の如く Mill は、マーカンタイル・システムの設定した貨幣と、他種一切の價値ある所有物品との間に於ける區別には、微弱ながら設定した理由に論據があるとした。然らば其論據は如何。Mill に依れば、吾々が眞實に且公正に考察する人間は、彼が現實に享樂した、有用にして快適なる物件（useful and agreeable things）には比例しないが、併し其有用にして快適なる物件の一般資金（general fund）に及ぼす支配力に比例して、富を利用するものである。然らば彼の支配力とは何ぞや。夫れは、彼の所有に係る、何等か急場に應ずる、或は何等か欲求の物件を獲得する力（the power he possesses of providing

for any exigency, or obtaining any object of desire）である。而して貨幣其物こそ、其力である。然るに文明國に於ては、他種一切の物件は、單に其物が貨幣と交換せられる能力を有する場合に限り、前記の力を賦與せられるやうに思はれる。從て富である或種の物品を所有するならば、夫れは要するに其特殊の物件を所有するに外ならない。即ち若し諸君が、其物件の代りに他の物件を希望するならば、諸君は先づ（イ）其物件を賣却するか、若くは（ロ）一時不便を感じ、且急場に役立たないのを忍んで、諸君の欲求した物件を所有し、而も諸君の所有物件と其物件との交換を承諾する所の他人を見すか、――是れは決して不可能ではない――兎に角二者其一、即ち（イ）か（ロ）かの方法を選ばなければならぬ。之に反して貨幣さへ所持する時には、諸君は即座に賣却せられる一切の物件を購買することが出來るであらう。

何人でも、自己の財産が貨幣の形態か、若くは急速に貨幣に變ぜられる物件の形態かに於て存在するならば、夫れは自己及び他人に對して、單に貨幣にて隨意に購買し得る何等か唯一の物件のみならず、又總ての物件をも占有するが如く感ぜられるものである。洵に適度の量額を超過した、富の效用の最大部分は、夫れが齎らす數多の逸樂ではなくして、寧ろ其所有者が凡ゆる一般目的の到達に就て彼の手許に在る保留せられた力（reserved power）である。併し斯く保留せられた力は、如何なる種類の富にも、貨幣の如く即時に又確實に賦與せられるものではない。實に貨幣は、啻に或種單一の使用に適用せられるのみならず、又同時に總ての使用に利用せられ得る、富の唯一の形態である。思ふに此區別が、往時の政府に對して愈々大なる印象を與へたものであらう。何故と云ふに貨幣は、幾多の政府に取て甚だ重要と感ぜられたものの一であるからである。

今日文明國と雖も、貨幣の形態にて諸稅が徵收せられるのでなければ、諸稅より受ける利益は、比較的僅少のものである。而して或國が、殊に他國征服のためなると、將又自國防禦のためなるとを問はず、――是れは最近まで國策（national policy）の二大眼目であつた――戰爭若くは軍費補償金として他國に、莫大なる、或は急遽なる支拂をなさねばならぬとすれば、此場合に貨幣以外の他種　切の支拂方法は、其目的に殆んど適應しないであらう。軈て是等一切の原因は、個人並に政府をして其財産評價の場合には、現實的にも可能的にも、專ら貨幣を重要視させ、而して――其財産の一部として考察した時には――他種一切の物件をば、唯だ獲得せられる場合にのみ、欲求の對象（objects of desire）の上に及ぼす不定にして即時的なる支配を與へる迂遠的獲得方法に過ぎないと看做さしめるに至つたのである。此欲求の對象こそ、富てう觀念に最も適應した言葉である。（註五）

是れが、Mill の認めて貨幣と他種一切の價値ある所有物品との區別に對する微弱なる論據となす所であるけれど、其設定した理由は、Mill の云ふ如く甚だ不充分である。從て所謂マーカンタイル・システム流行の結果は、當然貨幣は唯一の富なりと云ふが如き謬論を生起させるに至つたものである。然らば何故に斯る誤解を招くに至つたのであるか。夫れは Mill の所論を進めれば、自ら明白となるであらう。

六

一體如何なる不合理も、吾々が一度夫れを眞理たらしめる外見的狀態を發見しさへすれば、

最早合理的たることを得ない。併し Mill の云ふ如く、マーカンタイル・システムの理論と雖も、吾々が假令不完全なる方法を以てするにせよ、當時の事物の根柢を研究し、且日常に於ける談話の形式と語句とに依らずに、各種の根本的事實に基づいて、マーカンタイル・システムの理論の前提を攻究するに至れば、其眞實なる性質中に、何等か知得する所がなければならぬ。

Mill に云はせれば、當時の人々は、貨幣の眞義、即ち其根本的特質に於ける貨幣、及び貨幣の遂行する總ての職能の正確なる本質とは、如何なるものであるかと自問するや否や、即座に彼等の回想した所は、（イ）唯だ貨幣が他の物件と同じく其使用一切のために願はしき所有物件に過ぎないこと、及び（ロ）是等一切の使用が彼等を欺き現はれる如く無限に非ずして、寧ろ嚴密に制限せられた種類、即ち分配に參加する人々の便宜を計つて或産業の所産物の分配を容易ならしめると云ふ種類に屬することの二事である。更に考慮を廻らせば、貨幣の使用は、一國内に存在流通する貨幣の數量を增加することに依て、毫も促進せられる所はないと云ふ事實に想到するのである。而して貨幣の遂行する職能が、貨幣總額の多少を論せず、等しく果される事實も亦明瞭である。Mill の用例に從へば、二百萬クォーターの小麥は、二百萬人と云ふ多數を養ひ難いであらうけれど、英貨二百萬磅はより低位の呼價（nominal price）ながらも、四百萬磅と云ふ多額の取引を遂行し、以て夫れ丈け多量の商品を賣買するであらう。

貨幣其物は、何等の欲望を滿足するものでもなければ、又何等の目的に適應するものでもない。要するに、總ての人に取て貨幣の價値ある所以は、何人でも各種の所得を收受するに貨幣の形態を以てすれば、其所得が、爾後其收受者の必要に應じて隨時に、彼に有用たり得る各種の形態に ―換言すれば他種の物品に――幸便に變化すると云ふ點に在る。故に貨幣ある國と、貨幣なき國との間に存する一大差異は、單に便宜の有無てう一事に歸着する丈けである。茲に於て Mill は曰く、「夫れ貨幣の人をして時間と煩勞とを節約せしむるは、猶ほ製粉するに人力を用ひずして、水力を用ふるが如く、或は――Adam Smith の說明を引用すれば――道路の世を益するが如し。（註六）然り、而して貨幣を以て富と看做すは、恰かも諸君の家屋、又は土地に達する最も容易なる手段たる可き公道を以て、家屋又は土地其物と看做す底の誤謬に陷れるものなり」と。（註七）

以上が、マーカンタイル・システム及び此主義より生起した富と貨幣との混同に關する Mill の叙述である。

七

W. J. Ashley 教授の注意に依れば、マーカンタイル・システムに關する Mill の叙述は、Adam Smith の大著國富論（Wealth of Notions.）第四編第一章「マーカンタイル・システムの原理に就て」（of the Principle of the Commercial, or Mercantile Systems）に基いて居るのである。（註八）試みに私も國富論第四編第一章を窺いた所が、劈頭に左の如き類似の語句があつた。

「富は貨幣、即ち金若くは銀より成ると云ふことは、商業の要具及び價値の尺度としての貨幣の二重職能より當然生ずる俗見である。即ち貨幣が商業の要具である結果、吾々が貨幣を所持する時には、吾々は他の如何なる商品の仲介よりも容易に、吾々の必要とする他物を取得することが出來る。……貨幣を得さへすれば、吾

々は次に如何なるものを購買するにも全然困難を感じない。又貨幣が價値の尺度である結果、吾々は他種一切の商品を評價するのに、夫れが幾何額の貨幣と交換されるであらうかと云ふことを以てするのである。……要するに日常の言語に於て富と貨幣とは、總ての點に於て同義語と考へられて居る。……」（註九）

（註一）J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, Prelim. Remarks, pp. 1-2.
（註二）op. cit., pp. 2-3.
（註三）op. cit., p. 3.
（註四）op. cit., pp. 3-4.
（註五）op. cit., pp. 4-5.
（註六）the benefit derived from roads.
（註七）op. cit., pp. 5-6.
（註八）op. cit., p. 98f. Bibliographical Appendix A.—The Mercantile System.
（註九）Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, edited by Edwin Cannan, Vol. I. p. 356.

失業救濟施設に就いて（四・完）

（特に英國に於ける失業救濟を論ず）

園　乾　治

一三

國家または勞働組合の經營する失業保險の外に、各工場に於いて行はるゝ失業保險基金もまた失業救濟のために、相當の活動をなしてゐる。優れたる傭主は斷へず一定の勞働者を雇傭して置くことの利益なるを認め、最も有能にしてまた最も覇氣あるものから、最も大なる生産の結果を收得する政策を採用することの有利なるを知つてゐる。人々は永くその職に止り他に轉職する誘惑を受ざる時に、最もよく作業能率を增進するのである。然かるに失業は能率の發揮に對して大なる阻害となる。それによつて屢々傭主を變更し、熟練を現はすことが出來ず、そのために技倆の低下を來す結果となることも尠くない。のみならず長期に亘る失業ほど勞働者を失望せしめ、現代の傭主が得やうとする相互の信賴、信認の精神を破壞するものはない。

それ故に各國に於ける多數の傭主は、かくの如き弊害を伴ふ失業を可及的根絶せしめるやうに工場組織を改革しやうと努めてゐる。現今、普通の成績のよい工場に於いては、沈衰期に一部の職工を解傭してゐる。然しながら斷えず一定の勞働者を雇傭する政策が、望ましいものであるとすれば、失業のためにする施設は完全なものでなくてはならぬ。恐らく沈衰期には工場の作業は在庫品のために用ひられるやうに管理せられ、また世界の他の地方に於いて市場を見出し、一市場に於いて需要の最も少い時に、他の市場の需要は最も大であるやうにし、また或は普通の沈衰期には、他の特殊の生産を開始して、雇傭を繼續することが出來るものもあるであらう。

これ等の方法は、英米に於ける科學的に經營せらるゝ工場に於いては、珍らしいものではない。また獨佛に於いても相當の試が行はれてゐる。例へば米國の New York, Massachussetts 兩州には工場の保險法が設けられ、Cleveland の Joseph Feiss 及び Ford の兩工場、獨逸に於いては Karl Zeiss 工場、Lindenhof の Heinrich Lanz の工場を初め Aitona の A. L. Mohr の工場 Cornelius Hügl の工場、Weinheim の Karl Freudenberg の工場等の成績は、見るべきものがあるやうである。英國に於いては既に多數の工場がこれを採用し、就中 York のロ、ア製造工場である Messrs. Rowntree & Co., Ltd., が最も用意周到なる設備を有してゐる。それは